Letter to the Editor

第 1 回「明日の質量分析を創る若手討論会」開催報告**Report of “The 1st Meeting of Young Generation
Creating Next Mass Spectrometry”**佐藤浩昭^{1, 2}Hiroaki SATO^{1, 2}¹ 関東談話会世話人代表 *Chair of Kanto-Area Colloquium*² 独立行政法人産業技術総合研究所環境管理技術研究部門 *Research Institute for Environmental
Management Technology, National Institute of Advanced Industrial Science and Technology (AIST),
Tsukuba, IBARAKI, JAPAN*

編集長殿，ならびに会員諸氏

関東談話会と企画委員会の共催で、2006 年 12 月 6～7 日に、日本電子株式会社山中湖保養荘を会場として、第 1 回「明日の質量分析を創る若手討論会 ～シーズとニーズの融合、そして野望～」を開催したので報告する。

質量分析は、ニーズとシーズが融合しながら発展してきた分野であるが、最近では、分野の細分化が進みすぎて、分野横断的であるメリットが薄れ、お互いの交流・理解が難しくなってきた感がある。そこで、「ユーザーとメーカー」、「ハードとソフト」、「基礎と応用」、「有機、無機、バイオ」、「産学官」など、さまざまな分野・立場の違いを超えた若手が、質量分析をキーワードにして語り合う機会を設けるため、1泊2日の合宿形式で本討論会を開催した。次世代の質量分析を創造する熱い野望を共有する若手が、切磋琢磨しながら、大きく羽ばたくきっかけになることを願って、サブタイトルを「シーズとニーズの融合、そして野望」とした。

夏に関西地区で学生主体の合宿が開催されたこともあり、本討論会では学生よりも、技術・研究系、および質量分析に関わる営業などで質量分析に関わって数年程度（目安として 30 歳半ば以下）の若手を対象とした。参加者全員が膝をつめてとことん議論・討論できるようにするため、定員を 30 名程度（世話人 6 名を含む）と少なく設定した。実際の参加人数は、28 名であり、世話人以外の内訳は、学生・大学院生 4 名、企業関係者 12 名、および独立行政法人および財団法人系研究機関関係者 4 名、および大学教員 2 名であった。本討論会の運営は関東談話会が担当したが、募集は関東地区に限らず全国を対象とし、実際に関西・中京地区から 6 名の参加があった。

会場の山梨県南都留郡山中湖村の平野地区は、雄大な富士山が映る山中湖に面した風光明媚な場所で、夏はテニスやフットサルなどの合宿地としても有名である。とはいえ、討論会が開催された 12 月は寒さが厳しくなる頃（平均気温は 0.1℃）で、テニスを行う者など皆無であり、当日はうす曇で一日中暖房が欠かせなかった。事前に十分な防寒を呼びかけたため、参加者はさまざまな防寒着を身にまとい会場に集まったが、素足にサンダルといういでたちで平然と現れた猛者もいた。

初日の 12 月 6 日は、14 時から討論会が始まり、趣旨説明と会場利用上の注意に続いて、参加者全員で 6 分間のショートプレゼンテーションを行った。ここでは、単なる自己紹介に留まらず、質量分析との関わりや将来展望などを交えて自己主張してもらった。凝ったパワーポイントのスライドを利用したプレゼンテーションや、身振り手振りだけで話すなど表現方法はさまざまであったが、巧みに経歴や趣味などを交えつつ、しっかりとした自己主張が行われており、プレゼンテーション能力のレベルが高い参加者が多かった。

続いて、討論話題提供として世話人の中から、山田尚之氏（味の素）が「ニーズとシーズの融合：コンセプト主導の重要性」の演題で講演を行った。ここでは、山田氏と交流のある早稲田大学客員教授藤末健三氏の講義内容を中心に“Management of Technology (MOT)”の概念を紹介しながら、コンセプト主導の開発によるイノベーション戦略について解説し

佐藤浩昭(Hiroaki SATO); 独立行政法人産業技術総合研究所環境管理技術研究部門 (〒305-8569 茨城県つくば市小野川 16-1); e-mail: sato-hiroaki@aist.go.jp

(Received February 2, 2007; Accepted February 6, 2007)

写真 1

た。イノベーション戦略では、市場ニーズと革新技术（シーズ）を組み合わせたコンセプトが重要であり、そのコンセプトを実現するための技術ロードマップを的確に創ることによって研究開発の方向性が定まるといふ。また、アーサー・コンバーグの「必要は発明の母」であることは滅多になく、真の発明が必要を生み出す」という名言を引用し、すでにあるニーズに応えるために技術開発を進める「必要は発明の母の発想」だけでは参入障壁が低いと強い競争力をもつことは難しく、画期的な技術革新により潜在ニーズを引き出すことが重要であることが述べられた。これらの概念は個々の人生にもあてはまり、高い志をもち、これに向けた人生のロードマップを創って欲しいとのメッセージが贈られた。最近、研究戦略や政策でイノベーションが語られることが多いが、その具体的な戦略ポイントを知る機会はそう多くはない。本講演では、質量分析に関する話は皆無であったが、質量分析は分野横断的であり、「ニーズ」と「シーズ」それぞれが融合しやすい分野であることから、これから各分野でリーダーとなる若手には示唆に富んだ貴重な講演であったのではないだろうか。

講演終了後、自由時間を利用して温泉ツアーを企画した。当初、会場の近隣にある山中湖平野温泉「石割の湯」に行く予定であったが、出発間際になって会場管理人より定休日であることを告げられ、急遽、「紅富士の湯」という別の温泉施設に向かうことにした。過去に立ち寄ったことがあるという世話人の一人が、かすかな記憶を頼りに場所を確認せずに先に出発し、皆があわててそのあとを追うという格好となり、道を尋ねようとしたガソリンスタンドの先に温泉の看板を見つけて、なんとか無事に到着した。富士山のマグマに温められた泉質は上々で、気温4℃の通路を経てたどり着いた露天風呂は格別であったが、出発の時間をロスしたうえ、その後の夕食およびポスター講演のスケジュールが詰まっていたため、わずかな時間しか湯につかれなかったことが残念であった。

夕食後、参加者全員でポスター講演を行った。本討論会では、参加者それぞれが質量分析を通じてどのような夢・希望・野望をもっているかを主張することを目的としたため、質量分析をキーワードとして話題提供できるものであれば研究途中のものや既発表のものでもよく、企業関係者には製品紹介や企業紹介でも可とした。ただし後者に関しては、単なる宣伝行為ではなく、製品開発やマーケティングに対する意気込みなど何らかの自己主張を交えて発表することを求めた。ポスター講演では、本音で語り合うために、講演内容に関する記録（演題プログラムや要旨）は一切残さないことにした。実際に、学術発表ではできない「危ない」議論も交わされ、この趣旨を良く理解したポスターが多かったと感じた。30分ずつのコアタイムで2回に分けて発表してもらったあと、ポスターを肴に懇親会兼自由討論会を開催した。ポスター講演は畳敷きの座敷で行ったため、皆膝をつめて熱気あふれる討論が交わされた（写真1）。総合討論会やBMSコンファレンスなどでは実現できない、ユニークなスタイルであったと思う。参加者全員の投票によってベストポスターを2件選び、翌朝、より詳しく講演してもらうことにした。

ポスター発表兼懇親会会場は管理人の居室の脇であったため、夜も更けた頃、いったんお開きとし、引き続き宿泊部屋で二次会を行った。夜中までひたすら自分の人生（ということにしておきます）を熱く語る者もあり、時間が経つのも忘れて会話が弾んだ。本人の名誉のため、詳細は触れないでおく。

2日目の12月7日は、ベストポスター講演のあと、参加者を6グループに分け、6名の世話人がコーディネートしながらグループ討論を行い、討論結果を代表者に発表してもらった。討論のグループは、異なる分野・立場の人が組み合わせるように、世話人が名簿を見ながら振り分けた。世話人会が提案した討論主題から各グループで選んでもらい、「ユーザーと

写真2

メーカーの良い関係とは」、「自分の研究ポジションを築くためにすべきことは?」、「あなたのボスってどんなヒト?—そのうしろ姿から自分が透けて見えてくる—」などが討論された。これは、企業、特にメーカーからの参加者が多かったことを反映してのことであったと思う。グループ研修のようなスタイルでもあり、昨晚遅くまで起きていたことを考えると、果たしてどこまで議論が盛り上がるか世話人会で懸念していたが、実際には座敷で車座になったり、宿泊部屋でコタツを囲んだりしながら、時折爆笑が起こる中、真剣な討論が進んだ。

約2時間の討論のあと、討論内容を模造紙にまとめてもらい、各グループの代表にそれぞれ5分程度で発表してもらった。例えば、「ユーザーとメーカーの良い関係とは」を選んだグループは、「すぐ来いメーカー! 眠るなユーザー!」というやや過激なタイトルで発表を行った。ここでは、突然装置が故障したときに何でも良いからすぐにアドバイスが欲しいのに、サポートセンターに電話しても音声案内に従って機械的に処理されることへの不満や、ユーザー講習会で苦労して準備したプレゼンテーションを行っても居眠りするユーザーへの不満があることなどが具体例として示され、こうしたお互いの不満を乗り越えて良い関係を構築するにはお互い対等な立場で議論できる場が必要であることが主張された。現実的には総合討論会では学術発表を行う研究者が主役であり、BMS コンファレンスではメーカーがユーザーをもてなすスタイルが定着していることを考えると、メーカーとユーザーの対等な関係が学会活動では構築しにくい実情が浮かび上がった。特に、BMS コンファレンスにおけるホスピタリティスイートについて、本音の議論があった。日本質量分析学会の今後のあり方を考えるうえで重要な指摘がなされたと思う。その他の発表も、討論内容がコンパクトにまとめられ、笑いを取りながらも重要なポイントを短い時間で的確に指摘するというレベルの高いプレゼンテーションであった。

最後に、総括講演として世話人である平山和雄氏 (Science Education) による「タンパク質の質量分析—世界を切り拓くことの愉しさと孤独—」の講演を行った。ソフトイオン化技術が未熟であった1980年代頃に、世界に先駆けて質量分析法によるタンパク質の分析を行っていたが、当時、追隨する研究者がなかなか現れないため研究内容に不安や孤独を感じながら研究を進めてきたことが述べられ、強い信念をもって研究を進めることの重要性が述べられた。これは、第53回質量分析総合討論会(2005)で講演された内容であるが、今回の参加者の多くはその講演を聴いていないため、再度講演したものである。質量分析の大先輩から若手研究者に向けた力強いエールであったと思う。

今回の若手討論会は、挑戦的なタイトルをつけて参加者を募集したこともあってか、個性的な若手が集まり、熱気あふれる真の討論や交流が行われたと感じた。上記でも触れたが、今回の参加者は、ショートプレゼンテーション、ポスター講演、およびグループ討論でしっかりと主張を行い、そのプレゼンテーションの技量もかなりのハイレベルであった。集合写真(写真2)に写っている参加者は、さまざまな立場から今後の質量分析を牽引する新たな原動力になると強く感じた。本学会関係者は、ぜひともこの写真の顔ぶれを覚えてくださり、今後の活躍に期待していただきたいと思う。

第1回「明日の質量分析を創る若手討論会」世話人(50音順)

川上隆雄(東京医科大学)、佐藤浩昭(独立行政法人産業技術総合研究所)、高橋 豊(日本電子株式会社)、平本昌志(アステラス製薬株式会社)、平山和雄(Science Education Co., Inc.)、山田尚之(味の素株式会社)